

一、はじめに

オウム真理教（以下、オウムまたは教団）の武装化の経緯のうち、BC兵器および核兵器に関して私が知ることを述べさせていただきます。教団が武装化を推進させていた期間中（平成二年三月頃から同三年七月頃まで、同五年二月頃から同七年三月まで）、私は継続してそれに関与しており、右記兵器に関しては、ボツリヌス・トキシゲン生産プラントの操作、ホスゲン生産プラントの一部の設計、炭疽菌噴霧器の部品の製作、ウラン鉱石の探索ほかを麻原から指示されました。これらの作業を指示された理由には、私が物理を専門としており、教団の科学班（正式名称はCSI=Cosmic Science Institute、広報技術、真理科学研究所、科学技術省と変遷）に所属していたからです。一方、私は生物・化学が専門ではなく、それらを専門とする教団内の部署に所属してもいなかったので、BC兵器そのものの開発は指示されませんでした。

また私は、麻原から直接指示を受ける立場にあつたため、武装化の動機・目的なども聞いておりますので、それも述べさせていただきます。オウム関係者の思考・行動に影響を及ぼした宗教的経験など、武装化・破壊的活動の背景の詳細に関しては、必要であれば、冊子『オウム真理教元信徒の手記』と現在執筆中の冊子『オウム真理教元信徒の手記2―教団の武装化』を参考にしていただければ幸いです。

なお本手記には、教団で高い地位にあつた者、有罪判決を受けた者、あるいは武装化において重要な役割を果たした者の氏名のみ記します。

二、教団の武装化・破壊的活動（ヴァジラヤーナの救済）の経緯

教団の武装化・破壊的活動の目的について、麻原は「人類の救済」である旨を述べていました。オウムの教義の見地からは、現代人は悪業をなしているのです、その報いとして、来世は苦界に転生するとされていきました。それを救済するために、人々を殺害してより幸福な世界に転生させたり、あるいは武力を用いて地球上にオウムの国家を実現し、人々にオウムの教義を実践させたりする必要があると麻原は説いていたのです。この救済方法は、「ヴァジラヤーナの救済」と呼ばれていました。

以下、同救済に係るトピックスを時系列に記します。

1. 麻原における、ヴァジラヤーナの救済の動機の源泉

麻原が同救済を意思した動機の根本には、「アビラケツノミコトになれ」との啓示を受けたことがあると思われれます。この体験について、麻原は雑誌『トワイライトゾーン』昭和六十年十月号で述べています。

それによると麻原は、同年五月神奈川県三浦海岸で修行中に、天から降りてきた神の声を聞いたそうです。その意味を調べたところ、「アビラケツ」はサンスクリット語であり、アビラケツノミコトは「神軍を率いる光の命」、戦いの中心となる者のことでした。つまり、麻原は神から、西暦二一〇〇年から二二〇〇年頃にシャンバラ（聖人たちが住み、全宇宙の英智を有する幻の国）が現れることを告げられ、その実現の

ためにアピラケツノミコトとして戦うように命じられたと述べているのです。

また同誌において、麻原は次のようにも述べています。

「二〇〇六年には、核戦争の第一段階は終わっているでしょう。日本も死の灰の影響を受けているはずです。核戦争は、浄化の手段ですね。だから、私は『ノアの箱船』も信じられません。選りすぐったレベルの高い遺伝子だけを伝えるんです。だけど、人が『自分の分け前をさいて人に与えよう』というように考えない限り、『浄化』はならないんですね。そういう気持ちになれないのが人間でしょう。私の目指すのは『最終的な国』なんです。それは、仏教的・民主主義的な国で、完璧な超能力者たちの国なんです。」

右記「選りすぐったレベルの高い遺伝子だけを伝える」の意味は、シャンバラの実現のために「選民」が必要ということだと思われまます。シャンバラには、許された聖人しか住めないからです。

次の事実から、右記啓示の実現のために、麻原はヴァジラヤーナの救済を意思したと認められます。

すなわち平成六年六月頃、自動小銃製造についての会合の際に、麻原は私どもに対して、「アピラケツノミコトになれ」との啓示がヴァジラヤーナの救済の始まりだったと述べました。また麻原は、同救済を推進する意思を表明したと考えられる昭和六十三年十月二十八日の説法、およびボツリヌス・トキシン散布計画を明らかにした平成二年四月の説法でも、右記啓示や「選民」に関連したことに触れています（本手記三ページおよび八ページ）。

宗教的な啓示の体験が体験者のその後の行動に多大な影響を及ぼした例は、多数知られています。麻原において、実現不可能といえるシャンバラの実現（ヴァジラヤーナの救済）を着想し、相当の期間にわたって執拗にその実現を図ろうとしたのは、その種の宗教的経験の影響のためかもしれません。ただし、麻原は周囲の状況に対する適応性には全く問題がなかったことから、精神病とは見なされていないようです。

なお、右記啓示を受けた当時、麻原はオウムの前身である「オウム神仙の会」を主宰していました。これは、古来のヨガ・仙道・大乘仏教・チベット密教などの系統の修行をする集団でしたが、宗教団体は名乗っていませんでした。その会員数は、昭和六十年十二月の時点で、十五名でした（警視庁作成の資料より）。また麻原も、「最終解脱者」を主張しておらず、修行途上でした。

2. 麻原における、ヴァジラヤーナの救済に向けての予備的行動

以下に指摘のように、教団の拡大に支障が生じる事態になる度に、麻原はヴァジラヤーナの救済に向けた行動を先鋭化させました。また麻原は、「預言書」を解説するこ

とよつて同救済への現実感を深め、これを推進させていったように思えます。

昭和六十三年九月二十七日、富士山総本部道場で修行していた在家信徒の真島照之氏の死亡事故がありました。麻原らは、同事事故が教団の拡大の妨げになることを恐れ、その隠蔽のために真島氏遺体損壊事件を起こしました。この際、麻原が「これはヴァジラーナへ入れというシヴァ神（オウムの主宰神であり、麻原の霊的指導者）からの示唆だな」といったのを、早川紀代秀が聞いています（参1―「参」とは本手記末尾に記載の参考文献を示します）。

その一か月後の十月二十八日、麻原は一般出家者に対して次の説法をしました。

「わたしは今から三年前に、これは『トワイライトゾーン』を使って、わたしはアビラケツノミコトであると、そして光の軍勢を率いて救済するんだと、そういう比喩を使っている。

当初、初めは、わたしはね、凡夫（仏法に帰依していない人）を救済するのがわたしの役割だろうと考えていた。しかし、近ごろわたしは心が少しずつ変わってきている。どのように変わってきてるかという点、ひよつとしたら、動物化した、あるいは餓鬼化した、あるいは地獄化したこの人間社会というものの救済は不可能なのかもしれないなど。そして、じゃあどうしたらいいかという点、新しい種、つまり、今の人間よりも霊性のずっと高い種、これを残すことがわたしの役割なのかもしれないなど。これはまだ漠然としたものである。はっきりしたものではない。だから、ずれるかもしれない。

来年のオウムの動きは、目ざましいものがあるだろう。そして激しいものがあるだろう。」（参2）

この説法は、ヴァジラーナの救済に向けての行動を開始する、麻原の意思を示すと思われます。

なお、麻原は説法の内容に応じて、それを説く対象を分けていました。一般出家者の説法の多くは、右記説法を含め、出家者以外の者が接することは許されませんでした。また、違法行為に関与する者に対する説法も、部外秘でした。

また、この説法を説いた頃、麻原は『ヨハネの黙示録』の解説を試みており、自身が世界大戦を起こし、諸国民を支配すると解釈していました（参3）。預言書を読んだの思い込みも相まって、麻原はヴァジラーナの救済に向かったのかもしれない。

右記説法の数週間後の十一月十五日、麻原は宮前一明（旧姓岡崎。当時、解脱・悟りを認められた高弟である「大師」の地位にあった）に対し、次のように人材の獲得を指示しました。

「六十三年十一月五日は黙示録の予言を麻原が七つの予言その後世界戦争。二〇〇〇年まであと一二年しかない。滅亡の日を出版しろと

一五日、オウムの方向性……旧約聖書によるとオウムの時間はあと七年、石油によってハルマゲドン、ソ、米、日 世界大戦デザイン編集がプロパガンダマシンに完璧にな(成?)りきること(人材と経済力のためでもある)

一・新信徒の獲得、二・人材ハンター(ブレインハンター)(信徒の中から選ぶ)、三・大学理数化学の人材をぬきとる、四・ドクター(医者)を集める、五・美人を集める(看板)、六・経済的センスを持つている人間(プロパガンダⅡ広報)七・法律専門家八・大師(一人で二〜三億)が五〇〇〇人 九・建築班一〇〇〇人 一〇・七年後大師だけで一四五〇〇億(宮前作成のメモより)

この指示では理系の人材の獲得が重視されており、科学力を用いたヴァジラヤーナの救済を麻原が意識していたことがうかがえます。実際、その頃教団は多くの在家信徒を出家させようとしており、これは「シツシャ(出家者)狩り」と呼ばれていました。その結果、同年末から翌年三月の年度末までに、約百人の在家信徒が出家しました。なお、私もこの折りに出家しました(平成元年三月三十一日出家)。

3. 田口修二氏殺人事件

平成元年二月十日、真島氏の遺体損壊を知る出家者・田口修二氏が脱会しようとしたので、教団の右秘密を守るために、麻原らは同氏を殺害しました。これは、教団による最初の殺人事件でした。

4. 武装化・破壊的活動の指導原理(ヴァジラヤーナの救済の教義)

前述のように、教団の武装化・破壊的活動はヴァジラヤーナの救済として行われました。同救済に関する教義は、主に平成元年四月七日から同二年三月ごろまでにかけて、麻原が一般出家者に対して説きました。この時期の説法のほとんどは、人を殺害してより幸福な世界に転生させるという「ポア」の教えでした。

当時麻原は、宗教法人の認可が遅れていたことに対して強い不満を抱いており、そのためにヴァジラヤーナの救済の説法を開始した可能性があります。事実四月二十五日、麻原は百人を超える出家者と共に都庁・文化庁に押しかけ、示威的に同認可を陳情しました。そして麻原は、教団に戻った直後に一般出家者に対して説法を行い、都庁・文化庁の対応を批判し、「救済を考えるならば、すべての、シツシャすべてがその道を歩くことは無理だけでも、少なくとも一部はどうだ、タントラ・ヴァジラヤーナの道を歩かなければ、真理の流布はできないと思わないか。どうだ。」と訴えました(参4)。

また、その頃に麻原がヴァジラヤーナの救済の説法を開始した理由は、前記「シツシャ狩り」によって、同救済を担う理系の出家者が集まったからかもしれません。事実、同救済についての初めての説法において、麻原は出家直後のCSIのメンバー三名(私・防衛大学応用物理学科卒・東京大学基礎科学科卒)を指名して質問しました(参4)。

ヴァジラヤーナの救済の教義は、極めて非常識といえますが、その基礎となる教義を受容していた信徒にとつては、次のようにリアリティーがあることでした。

オウムの教義においては、魂は輪廻転生するとされてきました。転生する世界を決めるのは、その魂が過去になしてきた行為であり、教義上の良い行いをなせば幸福な世界に、悪い行いをなせば苦しみの世界に転生するのです。これは、良い行いは善業（幸福な世界に転生する原因）として、悪い行いは悪業（苦界に転生する原因）として魂に蓄積され、それらの業によって死後の転生先が決まるということでした（なお、良い行い・悪い行いをなすことを、それぞれ善業・悪業をなすともいいました）。

また、苦しみを完全に滅尽するためには、輪廻から脱却する——つまり、業を滅尽して転生しない状態になる——しかないと言われていました。それは、今は幸福でも、幸福でいられる善業が尽きてしまえば悪業が優位になり、必ず苦界に転生するからです。この輪廻からの脱却を「解脱」といい、これは絶対幸福とされる境地でした。

解脱は信徒の目標でした。また、何万生も修行者として生まれ変わり、すべての魂を解脱に導くことが、麻原と信徒が目指した「救済」の最終的な目標でした。

当初、ヴァジラヤーナは、グル（霊的指導者。信徒にとつては麻原）の神秘的な力によって信徒を解脱に導く方法として説かれていました。つまり麻原は、業を滅尽した最終的な解脱の状態にあり、信徒が蓄積している悪業を引き受け、同時に、麻原が有する解脱に至る因を信徒に与えること——これを「エネルギー交換」、あるいは「カルマの交換」といいました——ができるかと主張していたのです。

このヴァジラヤーナによって信徒を解脱に導く場合、麻原は信徒に対して苦しみを与えました。これは、麻原が信徒に働きかけることによって、カルマの交換が起こるとされていたからでした。また苦しみを与えるのは、信徒の悪業を清算させる意味もありました。これは、蓄積された悪業に応じた苦しみが身の上起こると、その悪業が消滅するという教義に由来します。

このような指導によって、多くの信徒たちが解脱をはじめとする宗教的経験をしており、自身の悪業が麻原によって引き受けられたと感じていました。これらの体験は、暗示による幻覚と同様なメカニズムで生じたと思われる。（なお、ここまでの教義は、市販されていた麻原の著書にも記載がありました。）

右記ヴァジラヤーナの教義に基づいて、麻原はヴァジラヤーナの救済として「ポア」を説きました（参4に収録の平成元年四月七・二十五・二十八日、八月二十日、九月二十四日、同二年三月十三日の説法など）。当初ポアは、麻原が前記神秘的な力によって、信徒の精神を解脱の状態、あるいは幸福な世界に転生する状態に高めることでした。それが転じて、人々を殺害することによって、より幸福な世界に転生させることとして説かれるようになったのです。

「殺人」が救済としての意味を持ったのは、次の理由からです。オウムの教義では、現代は仏法が廃れているため、人々は悪業をなしており、その報いとして苦界に転生

する定めにありました。そして、人々はオウムの教義を受容できるだけの善業も尽きているので、悪業となる行為を止めさせるためには、人々をポアする必要があるときれたのです。ポアには、オウムの働きかけで人々を殺害することによって前記「カルマの交換」を起こし、麻原が人々をより幸福な世界に転生させるという意味がありました。また、人々を殺害することには、前記のような、苦しみを与えて悪業を清算させるという意味もありました。

信徒はこの「ポア」の教義について、私が知る限り、ほとんど抵抗なく受容したようでした。事実、麻原は話題について問いかけながら説法を進めていましたが、信徒は「はい」と肯定的に応じていました。そしてその後、麻原から実際に「ポア」を命じられた信徒はすべて、その指示に従ったようです。

その理由は、信徒は幻覚的な宗教的経験によって教義を現実として認識しており、価値観・規範意識が教義に沿うものに変容していたからでしょう(参5)。信徒の価値観においては、苦界に転生する苦しみはこの世の死による苦しみをはるかに超えるので、苦界への転生はいかなる犠牲を払っても回避すべきことでした。ですから信徒にとっては、ポアが救済になるという考え方は、決して逸脱したものではなかったと思います。むしろ、前記のようなヴァジラヤーナの指導に慣れ、かつその効果にリアリティーを感じていた信徒にとっては、ポアの教義は理論的・経験的に受け入れやすかったかもしれません。

なお、右記ポアの教義は、主に出家者に対して説かれていました。麻原と教義に対する帰依が確立していない者がこの教義に接すると、疑いを抱きかねないからです。入信間もない信徒が、オウムにおいてこの教義が説かれていることを知れば、直ちに脱会することになるでしょう。ですから、この教義が説かれ始めた頃に、教団は出家者に対して、在家信徒を含めてこの教義の他言を禁じました。

ただし、平成元年九月二十四日に東京本部道場において、麻原は在家信徒に対してポアを説きました(参4)。また、平成六年八月頃、ポアに関する出家者用説法を収録したテキスト(参4)が、在家信徒の一部に解禁されました。

また、ポアの教義を持ち出さないまでも、教団において麻原の指示は絶対であり、出家者はその指示に従うように習慣づけられていたので、麻原から「殺人」の指示があれば従ったかもしれません。

麻原の指示が絶対だったのは、前記のように、麻原が人の悪業を引き受ける能力を有し、その指示は信徒ひいては人類を解脱や幸福な世界への転生に導くためのものであったからでした。信徒にとっては、苦界への転生を避け、解脱や幸福な世界への転生をすることが唯一の救いであり、意味のあることでしたから、魂をそれに導くことができることされた麻原は、まさに神であり、絶対的な存在だったのです。

5. 教団の衆院選出馬・オウムバッシング・坂本弁護士事件

平成元年五月頃から、麻原は宮前ら側近の大師に対し、衆院選出馬の意向を示しました。ある出家者の両親の依頼を受けた代議士によって宗教法人の取得を妨害されたことから、「救済のためには政治力に訴えるしかない」との理由でした。そして同年八月頃、麻原が当時の東京四区（杉並区・中野区・渋谷区）から立候補することを前提に、同区において教団は派手な選挙活動を始めました。

しかし同年十月、『サンデー毎日』がオウムの出家制度・高額な非科学的イニシエーション・麻原の薬事法違反などを批判したことから「オウムバッシング」が始まり、選挙活動は水を差される形になりました。そのため教団は連日、外宣車（「街」では？）を毎日新聞本社に派遣したり、多数の信徒に指示してサンデー毎日編集部に電話をかけさせたりして抗議しました。

このような状況にあった同年十一月四日、教団は坂本弁護士の反オウム活動を阻止するために、坂本弁護士一家殺人事件を起こしました。

そして平成二年一月、教団は「真理党」を結成し、麻原ら教団関係者二十五人が東京・埼玉・神奈川の選挙区において、同年二月十八日投票の衆院選に立候補しました。しかし、結果は全員落選でした。

6. ボツリヌス・トキシシン散布計画

平成二年三月頃から同年六月にかけて、教団は山梨県西八代郡上九一色村富士ヶ嶺一一五三―二の施設（通称「第一上九」）において、ボツリヌス菌の培養によるボツリヌス・トキシシンの生産を試みました。同トキシシンは、信徒以外の人類を殺害する目的で、気球に搭載して全世界に散布する計画でした。本計画が、武力を用いた「ヴァジャラーナの救済」の始まりでした。

本計画についても、オウムバッシングや政界進出の失敗など、教団の活動が行き詰まった状況において、麻原はヴァジャラーナの救済に向かったといえます。

(1) 本計画の動機・目的

平成二年四月十日頃、第一サティアン四階（静岡県富士宮市人穴三八―一の富士山総本部道場に隣接する四階建ての施設。四階は麻原の住居でした）において、麻原は本計画の動機・目的について次の趣旨の説法をしました。

「現代人が悪業を積んでいるために、地球が三悪趣（地獄界・餓鬼界・動物界）化し、宇宙の秩序が乱れている。それを我々が正さなければならぬ。

これから上九で培養するのは、ボツリヌス菌である。この菌が生産するボツリヌス・トキシシンは、少量でも吸い込むと呼吸中枢に作用し、呼吸が停止する。そしてサマデー（三昧）に至り、ポアされる。

このボツリヌス・トキシシンを気球に載せ、世界中に撒く。これは、第二次世界大戦

中に日本軍が行った「風船爆弾」の方法である。中世ヨーロッパでペストが流行したときは黒死病といわれたが、今回の病は白死病といわれるだろう。

ここで、なぜ我々がやらなければならないのか、疑問が生じるかもしれない。これは本来、神々がやることだが（同年三月二十四日、麻原はその旨の説法をしていました。参四）、神々がやると天変地異を使い、残すべき者を残せないから我々がやるんだ。そして、縁ある者を地球に転生させて、真理の実践をさせる。

今回の衆院選は、私のマハーヤーナの救済（合法的な布教による救済）のテストケースだった。その結果、マハーヤーナでは救済できないことが分かったから、これからはヴァジラヤーナでいく。これは最初から分かっていたことだが、私もだいたい悩んだんだ。なあジューヴァカ（遠藤誠一の宗教名）、私はちょうど一年前にもこのようなことを言っていたよな。

この二週間のワークは精神的・肉体的に厳しいだろうが、この二十人で行う。」

この説法から、本計画は前記「アピラケツノミコト」の啓示を、麻原が実行に移そうとしたものと推測されます。つまり、この啓示は「シャンバラ（聖者の住む理想郷）の実現のために戦え」との趣旨でしたが、その目的で、残すべき者（シャンバラに住むことを許される聖者＝信徒）以外の「ポア」を計画したものと思われます。そして、地球の住人を信徒のみにして、その後地球に生まれてくる者に真理（オウムの教義）の実践をさせる環境をつくることを意図したのでしよう。

なお、麻原は石垣島へのツアーを組み、本計画の従事者以外の出家者・在家信徒・出家者の家族らを避難させようとなりました。同島に避難した理由は、同島が偏西風——気球を偏西風に乗せてボツリヌス・トキシンを散布しようとしていました——の進路から外れているからでした。

麻原は前記のように、現代人はヴァジラヤーナによってしか救済できないとして、ポアを説いてきました。また『ヨハネの黙示録』を独自に解釈し、著書『滅亡の日』において、自身が世界大戦を起こし、武力で世界を統治すると述べました。一方、その具体的な経験は公にしませんでした。

しかし本説法において、麻原はヴァジラヤーナの救済の具体的な手段を示し、同救済の開始を宣言しました。

本説法を受けたのは次の二十数名でした（地位・氏名・所属部署）。

正大師 石井久子（経理）

正悟師 上祐史浩（外報）

大師 村井秀夫（CSIリーダー）、富樫若清夫（同電子）、渡部和実（同機械）、飯田エリ子（支部）、都沢和子（同）、大内利裕（同）、岐部哲也（同）、T・K（同）、遠藤誠一（CMI）、G・S（CBI）、杉本繁郎（車両）、Y・K（同）

スワミ 中川智正（AHI）、広瀬健一（CSI物理）、T・H（同システム）、滝沢和

義（同電子）、T・M（同）、池田悦郎（CBI）、藤永孝三（同）
ブー 三塚芳広（CSI電子）（数名漏れているかもしれませんが）

ここで、正大師・正悟師・大師・スワミはそれぞれ、オウムにおいて定められていたヨガの七段階のステージのうち、四・三・二・一段階目の解脱・悟りを認められた者の地位でした。ブーは最下位の出家者の地位でした。所属部署については後述（本手記十ページから）致します。

右記の者たちは、古参の高地位の者と、本計画の実行に必要な技術者です。前者は本計画の作業要員でしたが、宗教的行為なので、悪業（汚れ）が少ないとされた高地位の者が選ばれたのでしょうか。

説法後、麻原は右記の者に対して各任務を指示し、全員それに従って作業を開始しました。

(2) 本計画の経過

平成二年三月頃、物品の購入などの本計画の準備開始。ボツリヌス菌については、新実智光らが北海道の原野で採取を試みたと聞きました。第一上九でも、ボツリヌス・トキシン生産プラントの建設、ボツリヌス菌のテスト培養を開始。同年四月十日頃、麻原が同計画の中心的従事者に対し、前記説法。同年四月下旬、信徒らを避難させるための前記「石垣ツアー」を実施。同じ頃、大量培養を開始したが、雑菌が繁殖したために失敗。プラントの改造などをしたが、同じ原因で失敗が続く。同年五月頃、菌ができたかと遠藤が判断。教団は在家信徒らを山梨県富沢町の教団施設に避難させたが、不発。同年六月頃、顕微鏡によるチェックによって、種菌ができていないことが判明。その後、皇居周辺などで培養液を散布。この機会に、警察官から職務質問を受け、培養液を採取される。偽装工作をして捜査に備えたが、それ以上の捜査はうけなかったため、ほどこなく培養を再開。同年六月三十日、麻原は本計画の中心的従事者を極厳修行（修行のみに専念する状態）に入れ、本計画を中断。培養準備中に中断されたものであり、その理由は不知。同年八月上旬、プラントを再使用可能な形で熊本県波野村の教団施設に移動したが、その後使用せず。

(3) 本計画の従事者とその部署

右は次に述べるとおりですが、在家信徒はもちろん一般出家者にも秘匿されていたこととはいええ（ただし大師については、関与しなかった者も本計画について知らされていたようです）、教団のもつ広範な機能を活用しての計画でした。なお、本計画の組織を図1（本手記二十五ページ）に記します。

(ア) 教団代表・教祖

麻原は前記のとおり、本計画の首謀者であり、中心的従事者に対して任務を直接指

示しました。オウムには指示系統に関して、自身が所属する部署の上位の者の指示にのみ従うという不文律がありました。したがって、本計画のように複数の部署が関与する場合は、その根本的な指示は麻原が行うしかありません。

その後麻原は、各中心的従事者に対して適宜指示を与えていたようです。たとえば私の場合、培養の失敗が続いたために直接叱咤激励されたり、あるいは村井を通して、培養液の殺菌法について指示されたりしました。

また麻原は、第一上九の専用のプレハブ棟において、瞑想することがあったようです。その目的は、神々への供養、あるいは作業を行っている場所を「清める」ことでした。

(イ) C M I (Cosmic Medical Institute 後に厚生省)

C M Iは生物・化学兵器の開発、イニシエーション(宗教的な秘儀伝授)の開発・生産、医学関連の仕事などを担当し、リーダーは遠藤でした。

C M Iが関与した兵器の開発については後述致しますが、科学班と共同作業をした部分しか私は知りません。また、C M Iが開発した代表的なイニシエーションとして、麻原のDNAを培養して信徒に飲ませる「DNAイニシエーション」がありました。そのほか、C M Iはソバ粉を原材料とする焼き菓子、ヨーグルトなどを開発・生産し、これに麻原の「エネルギーを込めた」ものがイニシエーションとして使用されていた。

本計画には、C M Iは遠藤ほかのメンバーが関与しました。遠藤は第一サテイアン二階研究室および第一上九C M Iプレハブ棟において種菌(大量培養の元になる菌)(九ページに「種菌」という言葉が使われています。そっちに注をつけたほうがいいのでは)の培養、第一上九の大量培養槽への種菌の注入、大量培養の結果のチェックなどを行いました。

本計画のため、私は遠藤からの依頼を受け、窒素ガスを五十本の試験管に送る器具を作成しました(本手記二十五ページの図2)。これは種菌の培養のために使用しました。ボツリヌス菌は嫌気性なので、培養液に窒素ガスを常に流入させながら培養していました。

大量培養の状況の検査については、私が第一上九のC S Iスーパーハウス(ワンルームの小型プレハブ小屋)において、培養液のペーハー(ペーハー計による)と吸光度の測定(分光光度計による)を行い、そのデータから遠藤が出来を判断しました。また、C M Iが第一上九のC M Iスーパーハウス(C S I?)において、培養液をマウスに注射してその毒性を検査しました。

しかしこれらの検査をしても、遠藤は培養状況の正確な判断はできないようでした。

なお私は、C M Iが管理する部屋にはほとんど立ち入ったことがないので、その詳

細は知りません。また、中川（AHI=Astral Hospital Institute 所属）の関与については、私が言及するまでもないと思いますが、遠藤と行動を共にしていたことが多かったようです。

(ウ)CSI

CSIの組織・設備・仕事の詳細は後述致しますが、BC兵器に関しては、CMIがその試験管レベルの研究を担当したのに対して、CSIはその実用化を担当したといえます。本計画において、CSIはボツリヌス・トキシンの大量生産に係る範囲を担当しました。その任務の詳細と従事者は次のとおりです。

(a)ボツリヌス・トキシンの大量生産の総責任者

右は村井でした。村井は同大量生産プラントの製作、および同大量生産の作業の総監督であり、同プラントの設計も担当しました。

(b)ボツリヌス・トキシンの大量生産プラントの設計・製作

右はCSI機械班が担当しました。同班のリーダーは渡部でした。設計とプラントの部品の機械加工はそれぞれ、第一サティアン一階の機械班室とCSI工場で行いました。横山真人（スワミ、CSI機械班）らも第一上九において、プラントの配管などの作業をしていました。

なお、前記のように麻原は「この二十人で行う」と述べましたが、実際にはそれをはるかに超える人員が現場で作業をしていました。ただし前記説法を受けず、かつ大師でもない者は、その作業の目的を知らなかったと思われる。

(c)ボツリヌス・トキシンの大量生産の作業（本手記二十六ページの図3）

右の現場責任者は私でした。私は二人の助手（CSI物理のスワミ、前記同システムのT・H）と共に、同プラントの殺菌、培養液の調合・殺菌、菌の培養、培養液のペーハー・吸光度の前記測定を行いました。また十数人の大師と共に、菌培養後の培養液の濃縮・乾燥、プラントの洗浄を行いました。これらの作業方法については、村井が私に教示し、それを私が現場の従事者に伝えました。また私は、気球の到達高度の計算、プラントで使用するフィルターの購入、紫外線殺菌装置（培養液・作業場の殺菌のため）の購入、恒温槽（ボツリヌス菌のテスト培養のため）の製作、ボツリヌス菌のテスト培養、中古で購入した真空乾燥機（培養液の乾燥のため）の修理を行いました。

(d)ボツリヌス菌大量培養槽の制御盤および出力三〇キロワットの無線機の製作

右は、CSI電子班が第一サティアン一階の電子班室などで製作しました。同班のリーダーは富樫でした。

制御盤はシーケンサーによって、培養液の温度を制御するものでした。また無線機は、本計画によって日本の通信システムが壊滅したときに備え、教団の各支部との通信用に製作したものです。出力三〇キロワット用の真空管を使用しましたが、出力数キロワットの無線機になったと富樫から聞きました。

(e) 気球の製作

右の責任者は上祐であり、滝沢が第一サティアンで製作しました。気球は、ナイロン・ポリエチレンのラミネートフィルムをアイロンで融着して気のうち（気嚢ですか）にし、その中にヘリウムガスを充てん（充填ですか）しました。この気球に、同フィルムでパックしたボツリヌス・トキシンを吊す予定でした（本手記二十六ページの図4）。このパックをターゲットの上空で落下させる装置が必要との話を上祐・村井・富樫がしていました。それ以上の具体化はされなかったようです。

(f) 第一上九の本計画関連施設の配電工事

右は、電気工事士の資格を有し（？）CSI電気班だった林泰男（スワミ）がCBIと主に行いました。

(g) 気球を飛ばすための天候調査

右はCSIシステムが担当しました。人工衛星から天候に関する情報を受信して調査したと聞きました。

(h) CBI (Cosmic Building Institute)

CBIは富士山総本部道場、第一サティアンをはじめとする教団施設を建設しており、四階建てのビルを自力で建設できる能力を有していました。リーダーは早川紀代秀（大師）でした。

本計画においては、第一上九の関連施設（すべてプレハブ棟でした）の建設を池田らが行いました。また、プラントの本体は培養槽などの槽であり、これらはステンレス板を切断・溶接して製作しましたが、その作業を藤永らが行いました。プラントの設置・配管・電気工事もCBIが行いました。

(o) 車両班

教団は十トントラックやバスなどの大型車を含む多数の車両を所有しており、大型免許をもつ車両班のメンバーが輸送に携わっていました。

本計画においては、杉本らが培養用の水を、ミルクローリー（容器10³m³のステンレス製タンクを搭載）で富士山総本部道場から第一上九に運搬しました。この作業は、水が必要なときに、私が杉本らに依頼しました。

(カ)各支部など

前記以外の部署に所属していた従事者は次のとおりです。

石井は教団の経理のリーダーであり、本計画に關しては、後記湯浅電池社製フィルターの購入のために、私に四百万円を渡しました。ただし石井は、私の案内で第一上九のプラントの見学をしたものの、同現場での作業はしませんでした。

上祐は外報ほかのリーダーであり、本計画においては気球製作のリーダーでした。飯田・都沢・大内利裕・岐部、T・Kは、教団の支部で在家信徒の指導や布教に携わっていましたが、本計画においては、菌培養後の培養液の濃縮・乾燥のための作業、プラントの洗浄作業を行いました。同作業には中村昇（支部）ほか、前記（九ページ）以外の大師も数人携わりました（ただし検察官によると、中村は前記説法の場合にいたとのことです）。

右記大師については、村井が作業を依頼することもありましたが、村井は第一上九に常駐していなかったため、生産工程が大師らの担当にさしかかると、主に私から依頼していました。

また大師の山本まゆみ（支部）が、第一上九のC M Iスーパーハウスにおいて何らかの作業をしていました。

なお、前記所属部署は、各人について代表的なものです。異動や兼任もありました。（岐部についてはデザインといったほうがいいかもしれません。）

(4)本計画のための施設・設備

第一上九内の施設・設備は次のとおりです。その状況を、本手記二十七ページの図5に示します。なお麻原によると、本計画の費用は三億円とのことでした。

(ア)プラント棟

ボツリヌス・トキシシン大量生産プラントは、プレハブ棟の中に設置しました。このプラント棟の内部の状況を本手記二十八ページ図6に示します。プラントの詳細については後述（十八ページから）致します。

本計画における、プラント関連の主な購入品は次のとおりです。

・ボイラー（ジョンソン社製） 同ボイラーの蒸気によって、培養槽などのプラントを殺菌しました。

・サニタリ配管 プラントの配管は、食品工場等で使用されるステンレス製の「サニタリ」と呼ばれるものを購入しました。これは取りはずしが可能で洗浄しやすく、雑菌繁殖防止仕様です。（Sanitary）

・シーケンサー（四台） 培養液の温度をコントロールするために使用しました。つまり、熱電対とヒーターがシーケンサーに接続してあり、熱電対によって測定した温度が設定値未満だった場合、ヒーターのスイッチがオンになります。

・ヒーター（カンタル・ガデリウス社製） 培養槽の中に入れ、培養液の加熱のため

に使用しました。ヒーターはガラス管の中に電熱線が入っているタイプで、一本の出力は一キロワット以上ありました。

・紫外線殺菌装置（二台） 培養水の殺菌のために使用しました。一分間あたりの処理量は一〇〇リットルを超えていたと思います。

・紫外線殺菌ランプ プラント棟の天井に設置し、プラントの周囲の殺菌をする予定でした。

・穴径〇・一ミクロンのフィルター（三菱レイヨン社製 十二本程度） 培養液中のボツリヌス菌と同トキシンを培養槽に残し、同槽から培養液のみを排出する目的でした（本手記二十ページ）。

・穴径一ミクロンのフィルター（クラレ社製 十二本程度） 培養液中のボツリヌス菌と同トキシンのうち、後者のみを抽出する目的でしたが、実際には左記フィルターを使用しました。

・穴径一〇ミクロンのフィルター（湯浅電池社製 十六本程度） 使用目的は同右（本手記二十ページ）

・真空乾燥機 ボツリヌス・トキシンを含む培養液を乾燥させるために使用予定でした。真空槽の容量は1.3m程度でした。

・アクアラング ボツリヌス・トキシンの乾燥・粉末化工程において、防毒のために着用する目的でした。

・噴霧器（霧のいけうち社製） 菌培養後の培養液を皇居周辺などに散布するために使用しました。

・ブドウ糖・大豆由来のペプトン・牛乳由来のペプトン・食塩・リン酸化合物・カゼイン 培養液の材料でした。購入費は数千万円以上と思われる。

・液体窒素ボンベ 培養液に空気を混入させないために、培養槽に窒素を流入させていました。購入費は一千万円程度でした。

・次亜塩素酸ナトリウム溶液 ボツリヌス・トキシンの乾燥・粉末化の作業後、着衣を消毒する目的でした。2.3m程度購入しました。

・ミルクローリー 前記のとおり水運搬用でした。

(イ) C M I 棟

右はプレハブ棟で、遠藤が種菌の培養などをしていました。同棟の天井には紫外線殺菌ランプが取り付けられていました。

(ウ) 麻原棟

右はプレハブ棟であり、時おり麻原が訪れ、従事者に指示を与えたり、瞑想をしたりしました。

(エ) スーパーハウス群

第一上九には、CMI、CSI、村井、中川がそれぞれ使用するスーパーハウスがありました。本計画に係る作業は、前述のように前二者において行いました。

なおCSIスーパーハウスには、CMI所有のペーハー計と分光光度計がありました。ペーハー計は、ガラス管の中に電解液が注入されており、そのガラス管を試料に入れて測定するタイプでした。分光光度計は島津製作所製だったかもしれませんが、試料について、赤外領域から紫外領域までの光の透過率を走査測定し、吸光度のグラフとプリントアウトするタイプでした。また、吸光度がピークとなる光の波長も表示されました。

また、村井のスーパーハウスには電話機が設置してありましたが、盗聴防止のためにスクランブル機を使用して会話をしました。同機は受話器に取り付けるタイプでした。

(オ)コンテナ群

第一上九には十トントラック用の多数のコンテナが設置されており、培養液の材料の貯蔵庫、従事者の休憩室・食堂、修行場になっていました。

(5)私が関与した本計画の作業の詳細

私が関与した作業の概要は前述のとおりですが、そのなかで必要と思われることを詳述致します。

(ア)フィルターの購入

業者の話が参考になるかもしれないので、右について記します。

平成二年三月ごろ、私は村井から、孔径がそれぞれ〇・一ミクロンと一ミクロンのフィルターの購入を指示されました。前者は旭化成と三菱レイヨンにありました。私は両社の担当者と会いましたが、双方から取引を渋られました。市場を開拓中の製品のため、教団が不適切な使い方をして失敗すると、製品への信頼性が損なわれるとの理由でした。(なお、私は「株式会社オウム」として両社と取引を試みました。ただし旭化成は、富士山総本部道場を訪れたので、オウム真理教であることが分かったと思います。株式会社オウムは教団の関連会社であり、科学班のメンバーが業者と取引する際は、同社を名乗りました。)

旭化成の担当者にプラントの規模を説明したところ、テストプラントを製作して数年かけて設計すべき規模といわれました。しかし教団は、一か月あまりでプラントを完成させる計画でしたから、その無謀さのために同社から取引を断られました。

結局フィルターは、「失敗しても御社に責任はない」との趣旨の念書を提出することを条件に、三菱レイヨンから購入しました。

なお孔径一ミクロンのフィルターはクラレから購入しましたが、そのフィルターを使用する工程に入る直前に、私は村井から別のフィルターを探すよう指示されました

(その理由は知らされませんでした)。結果として、湯浅電池社製の穴径一〇ミクロンのフィルターが適したので、これを購入して使用しました。

(イ)紫外線殺菌装置の購入

平成二年三月頃、私は村井の指示により、工業用の紫外線殺菌装置を調査・購入しました。これは雑菌の繁殖を防ぐために、種菌投入前に、培養液を殺菌する目的のものでした。

問題点

同装置は適切に使用されませんでした。業社（業者では）が培養液を調べたところ、これは紫外線を透過せず、同装置によっては殺菌不能だったからです（それにもかかわらず、私は村井からその購入を指示されました）。そのため、同装置で真水を殺菌した後、これに材料を投入して培養液を調合するプロセスになり、この際に雑菌が混入する余地がありました。また後に、プラントの改造があったために、培養液を同装置に通すという意味のないプロセスになりました。

このように同装置によっては殺菌できなかつたので、結局、殺菌は培養液の加熱によって行いました（本手記十八ページ）。

(ウ)ボツリヌス菌テスト培養用の恒温槽の製作

平成二年三月頃、私は村井から右を指示され、第一サティアン一階のCSI室で滝沢と共に製作しました。この恒温槽はステンレス製のドラム缶（容量二〇〇リットル）を槽としており、培養液の温度を50℃まで加熱できました。

加熱はシリコンラバーでコートされた電熱線によって行いましたが、これはドラム缶の周囲に巻きつけてありました。温度の制御は（？）それ専用の既製の小型シーケンサーを使用しました。制御の仕組みは、前記のもの（十四ページ）と同じでした。また、ドラム缶の蓋の内側には、蛍光灯型の紫外線殺菌ランプを取り付けました。

問題点

右記恒温槽は、雑菌が繁殖する造りでした。紫外線殺菌装置を扱う業者から平成二年六月頃に聞いた話によると、菌の培養槽は容器の内側から溶接し、その箇所を滑らかに切削したうえに、容器の内側全体を電解研磨によって鏡面にする必要があるとのことでした。また、培養液も常に流動させる必要があるとのことでした。これは、雑菌がコロニーを形成する余地をなくし、その繁殖を妨げるためです。しかし、これらの条件を恒温槽は満たしていませんでした。

恒温槽にドラム缶を使用することを指示したのは村井であり、同人らはプラントについても、右記条件を考慮せずに設計していたといえます。

(エ) ボツリヌス菌のテスト培養

平成二年の三月か四月に、私は村井から右を指示され、これを第一上九のコンテナ内で行いました。私が同所へ赴いたときには前記恒温槽が置かれ、その中には既に培養液と菌が入っていました。

私は遠藤から、培養液のペーハーを六時間ごとに前記ペーハー計で測定することを依頼され、また液が漕（槽？）の外部に付着した場合は、アルコールで消毒するように注意されました。このように私は、培養液を30℃台の一定温度に保ち、五日間から一週間にわたって菌の培養をしました。

培養液のペーハーは次第に酸性になり、最終的にはph 2台になりました。培養液について、村井は「みそのにおいがしたらいい」、遠藤は「弱アルカリ性になればいい」といいましたが、そのいずれも起こりませんでした。

問題的

・種菌ができていませんでした。平成二年六月頃に中川から聞いた話によると、中川が実体顕微鏡を購入して種菌を調べたところ、三日月形のボツリヌス菌は確認されなかったとのことでした。私も中川と共に、大量培養中の培養液を同顕微鏡で調べましたが、三日月形の菌は見当たりませんでした。

中川によると、北海道の原野で採取した菌から遠藤がボツリヌス菌を分離し、これを純粹培養して種菌にするはずでした。しかし遠藤は、村井から「もういいやろ」といわれたために、その分離ができていないまま、大量培養に進んだらしいです。

・遠藤は私に対し、右記テスト培養中、培養液にブドウ糖を追加することも依頼しましたが、追加時の雑菌の混入を防ぐための指示をしませんでした。よって、この時点においては、遠藤は雑菌の混入に注意を払っていなかった可能性があります。

なお、以上(ア)から(エ)の作業時、私は本計画の目的（ボツリヌス菌の培養であることも）を知らされていませんでした。このように私は、麻原の前記説法以前の、本計画の成立過程は知りません（麻原は説法以前にも、私に対して気球の到達高度の計算を指示したり、窒素ガスを五十本の試験管に分配する器具の改良を指示したりするなど、本計画の技術的問題にも係わっていました）。後述のいずれの計画についてもまた、私が従事を指示されたときには計画は成立しており、私はその成立過程を知りません。

(オ) ボツリヌス・トキシンの生産のための作業

右は、次の(a)から(g)までのサイクルを五回程度行いました。ただし、各サイクルによって、工程の変更や省略がありました。

(a) プラントの殺菌工程

ボイラーの蒸気によって、培養液調合槽、培養槽、濃縮槽、およびそれらを結ぶすべての配管を殺菌しました。

問題点

培養槽が地面に接する箇所は、地面への伝熱のために、殺菌に必要な温度にならなかった可能性があります。そのほかにも、構造が入り組んでいる箇所は、高温の蒸気が届かなかった可能性があります。実際、種菌の投入前に雑菌が繁殖し、培養液が濁ったことがあります。

(b) 培養液の調合工程

まず真水を、プラント棟外の水槽（10³m³）から培養液調合槽（5³m³×二基）に送りました。プラントにおいては、液体の輸送はすべてポンプによりしました。

第一回目のサイクルにおいては、この真水を紫外線殺菌装置に通し、培養槽（10³m³×四基）に送りました。そして同槽に、ブドウ糖、大豆由来のペプトン、牛乳由来のペプトン、食塩、リン酸化合物を投入して培養液を調合しました。なお、村井が「ボツリヌス菌は肉を好む」といい、右にカゼインを加えたサイクルがありました。しかし、カゼインによって穴径〇・一ミクロンのフィルターが目詰まりしたので、これは一サイクルで止めました。

培養液調合槽で調合しなかった理由は、前記のように、紫外線殺菌装置では培養液の殺菌ができなかったからです。しかし後に、培養槽のかくはん機（攪拌機でなくともいいですか）を取り外したために同槽で調合できなくなり、かくはん機付きの培養液調合槽で調合し、その培養液を同殺菌装置に通して培養槽に送りました。かくはん機を取り外した理由は、かくはん機のシャフトが培養槽の天井を貫いて槽外部に伸びていたため、そこから雑菌が侵入する恐れがあったからです。

(c) 培養液の殺菌工程

右は、ボイラーからの蒸気によって、培養液の温度を沸点直前まで上昇させて行いました。その後、蒸気を止め、培養液を50℃まで自然冷却しました。また、培養液に空気を混入させないために、蒸気を止めてから培養終了まで、窒素ガスを培養槽に送り続けました。

しかし雑菌が繁殖したために、その後のサイクルでは殺菌法に変更がありました。それは、培養液を沸点直前まで加熱——30℃台まで自然冷却——沸点直前まで加熱——50℃まで自然冷却というプロセスでした。二回加熱した理由は、雑菌が「芽胞」の形になっていると熱に強く殺菌されないため、温度を下げてこれを発芽させた後に殺菌するためでした。

それでも種菌投入後に雑菌が繁殖したので（種菌が雑菌だったので当然のこと）

す)、麻原は培養液を急激に冷却することや0℃まで冷却することを指示しました。ただし、これは麻原のインスピレーションであり、科学的根拠はありません。前者のためには、培養槽に液体窒素を注入したり、培養槽に熱交換冷却器を結合したりして冷却しました。後者のためには、培養槽の上部などに寒材(氷に水酸化カリウムを混ぜたもの)を置いて冷却しました。しかし、培養液が大量なので、これらの方法では、冷却効果はほとんどありませんでした。

また平成二年六月頃、私は村井から紫外線殺菌ランプの購入を指示されました。これは、右記雑菌の繁殖が止まらなかつたので、プラント棟内の除菌を考えたものです。しかし、同ランプを購入し、プラント棟の天井に設置した直後に、本計画は中断されました。

(d) 培養工程

殺菌工程後、培養液の温度が50℃になったときに、これに遠藤が種菌を投入しました。その後、培養液の温度を38℃程度まで自然冷却し、その温度で五日間、菌の培養をしました。培養温度は各サイクルによって、数度の変更がありました。

また第一回目の培養においては、プロペラ付きのかくはん機によって、培養液を流動させていました。しかしその後、前記のようにかくはん機を取り外したので、培養液は流動させませんでした。

私は培養中、六時間毎に培養液を採取し、そのペーハーと吸光度の前記測定をしました。ペーハーは次第に酸性になり、多くは最終的にpH2台になりました。pH1台、あるいはpH3台になることもありました。吸光度については、ある波長のそれが次第に大きくなっていくことがありました。また培養液の色は、透明褐色から濁ったオレンジ、あるいはピンクに変化しました。

右記測定後私は、その結果と採取した培養液を遠藤に届けました。後者については、CMIがマウスに注射してその毒性を確認しました。

遠藤は各培養結果について、雑菌が繁殖したために失敗と判断しました。ただし平成二年五月頃、マウスへの注射によって「できたようだ」と判断しましたが、これは誤判でした。

しかし失敗とはいえ、村井も遠藤も、ボツリヌス・トキシンが多少は生成している可能性があると考えていたようです。たとえば村井は、培養液に沈殿した灰白色の生成物を同トキシンと考え、その保存を私に指示しました。また遠藤は、従事者が誤って培養液を培養槽から漏出させたときに、驚いた様子で、水酸化ナトリウムを撒いて消毒するようにはいいました。

結局前記のように、顕微鏡による検査によって、種菌さえできていなかったことが判明しました。

問題点

・培養槽の溶接を担当した藤永は、その内側から溶接しろとの指示がなかったため、外側からしたと行っていました。当然培養槽は、電解研磨による表面処理も行われておらず、雑菌が繁殖する造りでした。

・溶接不良のため、培養槽から培養液が漏出したことがありました。

(e) 濃縮工程

培養は失敗と判断されましたが、その後の工程も行いました。

培養工程後、培養液を孔径〇・一ミクロンのフィルターに通し、培養槽からある程度排出しました。この作業によって、ボツリヌス菌と同トキシンを培養槽中に残し、培養液中の同トキシンの濃度を高めるはずでした。次に、この培養液を濃縮槽横の孔径一〇ミクロンのフィルターに通してボツリヌス菌を除き、培養液と同トキシンのみ濃縮槽(約1.3m×四基)に貯留する予定でした。

(f) 乾燥工程

ボツリヌス・トキシンを含む培養液の乾燥・粉末化は、プラント棟内に造られたベニヤ板製の気密室(乾燥室)で行う予定でした。乾燥室は外部より気圧が低くしており、同トキシンの粉末が外部に漏出しないようにしてありました。この目的のために、プラント棟外に設置したブロワーを用い、乾燥室の空気を吸引していました。その空気は、燃えたコークスを通して無害化した後、棟外に放出するようになっていました。濃縮槽から乾燥室へは配管がしており、その末端の蛇口から培養液が得られました。培養液は、一辺30cmの正方形のアルミ製の平皿に張り、前記真空乾燥機で乾燥させました。しかし培養液は、その中に含まれていたタンパク質のためにキャラメル状になり、粉末化可能なようには乾燥しませんでした。そのため、後にヒーターを用いて乾燥させましたが、結果は同じでした。

なお、乾燥室で作業をする際には、全身をおおう雨合羽とエラライン付きのマスクを着用しました。後には、エアライン付きのアクアリングを着用するようになり、作業終了後、その装備のまま次亜塩素酸ナトリウム溶液のシャワーを全身に浴びました。これは、装備に付着した(と思われる)ボツリヌス・トキシンの無毒化のためでした。この目的のために、一人用のポータブル・シャワー室が、プラント棟外に設置してありました。

問題点

ボツリヌス・トキシンを目的に沿うように乾燥させるためには、同トキシ人と培養液の成分とを分離する工程が必要でした。

(g) 粉末化工程

以上の工程による生産物は、C S I機械班が設計・製作した粉砕器で粉末化する予定でした。粉砕器は、生産物と直径約7mmのジルコニア製の粉砕用硬球をステンレス製のドラム缶に入れ、これを回転させて粉砕する仕組みでした。

しかし、生産物がキャラメル状になったため、これを粉砕器にかけても粉末化は不可能でした。そのため、培養工程後の培養液を皇居周辺などに散布しました。

(カ)培養液の散布

平成二年六月頃、村井・新実らが培養液を皇居周辺に散布しました。この目的のために、私は村井からの指示によって、培養工程後の培養液を容量1m³のポリタンクに入れました。

平成八年五月、同十年三月の杉本の供述によると、杉本は同二年四月から七月にかけて五、六回、村井、新実、前記車両班Y・K、藤永と共に、粉末（初回）または液体を都心に散布したらしいです。麻原は杉本らに右を指示する際、「修行者だから吸っても大丈夫だ」などといったそうです。このことから麻原は、ボツリヌス・トキシンが生成していないことを承知のうえで、液体等を散布させた可能性があります。一方、このときに使用した二トン車等の運転室は、コンプレッサーによって気圧を上げており、散布物の侵入を防止してあったそうです。また、マスク等は使用しなかったとのことです。

杉本は粉末・液体を五、六回散布したと供述していますが、私が記憶しているのは前記の一回です。私が忘却しているのかもしれないし、培養工程後の培養液は車両で何度も廃棄しているので、私が知らないうちにそれを散布したのかもしれない。ただし前記のとおり、プラントでは粉末は生産しなかったので、粉末の散布が事実であれば、何らかの粉末を用いて散布実験をした可能性があります。

なお、遠藤が「できたようだ」と判断したときには、培養工程後の培養液を散布した記憶も、そのほか特別な指示を受けた記憶も私にはありません。

また、私は第一上九において、培養液散布車が製作されている状況を見ました。これは十トンのコンテナ車であり、培養液を入れるポリタンク、噴霧器、コンプレッサー、発電機（コンプレッサー駆動用）が搭載されていました。

噴霧器は「霧のいけうち」社製であり、手の平（掌では？）に載るサイズでした。これは、コンプレッサーによってその気体入口に送気すると、液体を液体吸入口から吸入・二つのノズルから噴出し、その噴流同志（同士？）をぶつけることによって微細な液体粒子を形成する仕組みでした。散布車には、この噴霧器が十数個搭載してありました。

なおこの散布車は、発電機が過熱したために使えませんでした。そのために、前記

二トンの散布車を新たに製作したと思われる。散布車は、その設計は村井が係わり、製作はCBIが担当しました。

(6)本計画の失敗の原因

本計画は、「問題点」として述べてきた技術的な問題が起きたために失敗しました。その原因について、以下考察します。

(ア)調査不足

教団はボツリヌス菌の培養法について十分な調査をせず、適切な方法で培養に携わりませんでした。

遠藤において、ボツリヌス菌の分離・純粹培養ができなかったことから、同菌の培養法について調査不足だったと考えられます。もともと、同菌は生物兵器なので、その培養法は公開されていなかったのかもしれませんが、それでも遠藤は、菌の分離・純粹培養ができているか(、?)確認する方法も確立していなかったことから(本手記十七ページ)、菌の一般的な培養法についても調査不足だった可能性があります。

また村井も、工業で行われている菌の培養法に基づいてプラントの設計をしなかったことから(同十六および二十ページ)、民生品レベルの培養法さえ調査していなかったと思われる。教団のおかれていた状況では、兵器開発をするのであれば、民生品レベルの技術を調査・習得し、それを参考にノウハウを蓄積して軍事レベルに近づいていくのが普通だったでしょう。しかし教団は、そのような手順を踏みませんでした。

(イ)実験不足

教団はテストプラントを製作せず、これを使用して設計に必要な実験を行いませんでした(同十五ページ)。そのために、最終的なプラントの設計前に解決すべき問題を発見できませんでした。

たとえば本計画では、プラントや培養液の殺菌が予想どおりにはできませんでした(同十八および十九ページ)。これはプラントの設計者において、スケールが大きいものの殺菌を、試験管レベルの煮沸消毒と同様に考えたことが原因と思われる。

スケールが大きいものを加熱する場合、伝熱・放熱による温度低下、あるいは加熱ムラなど、試験管レベルのスケールでは目立たない問題が起きます。このような問題は、テストプラントを製作して実験しないと気付きにくい場合があります。

しかし教団は、試験管レベルで通用している技術をそのまま「相似拡大」して、いきなり最終的なプラントを製作しました。そして問題が生じるのですが、プラントが大規模なために本質的な改造が困難であり、結果として計画が失敗に終わるのが常でした。

(ウ)技術不足

本計画の失敗の原因は、これまで述べてきたことから理解していただけたと思いますが、本質的に関係者の技術不足であり、そしてそれを克服する対策がとられなかったことにあります。教団の場合、培養槽の溶接不良もあつたように（同二十ページ）、何事も素人が行っていたので、右によって計画が失敗することが多々ありました。

ただし、培養槽の制御盤の製作など、電子・電気関係の仕事は良好でした。この分野は、企業においてその職に就いていた出家者がいたので、比較的信頼できる仕事となされていました。

(E) 時間不足

前記「調査不足」および「実験不足」の原因は、麻原が本計画の実現を極端に急ぎ、関係者に十分な時間を与えなかったことです。麻原が急いだのは、ボツリヌス・トキシンの散布を「オースチン彗星」の地球への接近に合わせようとしたのかもしれないが——平成二年四月、麻原は一般出家者に対し、同彗星が災いをもたらす旨の説法をしました——、その真意は不明です。

麻原はいずれの武装化計画についても実現を急ぎましたが、その「現実的な」理由はなかったのかもしれませんが。たとえば平成六年五月に、私は麻原から、既に指示されていた自動小銃（AK74を模したもの）の製造を急かされましたが、その理由は「今年の夏に、河口湖で米軍との撃ち合いがある」ということでした。これは、麻原が非常に鮮明で記憶に残る夢を見たものです。この種の夢は、教団では「ヴィジョン」と呼ばれ、宗教的な意味があると考えられていました。同年十月にも麻原は、私に対して右製造を急かしましたが、そのときは「もう予言のタイムリミットと現象のタイムリミットは過ぎ、あとは神々のタイムリミットだけなんだ」といつていました。つまり麻原は、「ヴィジョン」等の宗教的経験や自身が解釈した予言書が示す時期に合わせるために、各武装化計画の実現を急いだ可能性があります。

また、その時期に計画が実現していなかったら、麻原にとつては、計画の実現の「根拠」である「ヴィジョン」等が外れたことになり、計画に意味がなくなつたのかもかもしれません。実際麻原は、計画に強い関心を維持するのは初めの数か月間であり、その後は関心を失い、別の計画に移ることがよくありました。

以上のように、本計画の結果は幸いなことに、ある条件が満たされれば成功したといえるレベルにさえ達しませんでした。ですから、本計画が成功した状況は、推測に推測を重ねることではか考えられません。

まず、ボツリヌス菌の試験管レベルの純粹培養は、菌の一般的な分離・培養の技術を調査・習得し、目的の菌が採集できれば、教団でも可能だったのでないでしょうか。それは、ボツリヌス・トキシンのによる食中毒が自然発生的に起こることから考えると、同菌の成育条件はそれほど特殊ではないと思われるからです。

他方、大量培養になりますと、教団の人材で可能だったか予測が難しくなります。

まず、民生品レベルの培養技術の導入は、時間と費用をかければ可能だったと仮定できるとしよう。この場合、ボツリヌス菌の大量培養と同トキシンの生産が、雑菌の繁殖防止などの（、？）民生品レベルの技術によって可能になるならば、計画は成功したかもしれませんが。しかし、同トキシンの毒性や収量などを兵器レベルに高めるためにはほかの技術（ノウハウ）が必要ならば、それが開発できたかは未知数です。

教団には、企業などで工業的な技術の開発を経験した人材がいなかった（あるいは活用されていなかった）ように思えます。ですから、大学で理系の学問的な教育を受けた出家者が、ゼロからの技術開発を指導者なしで成功させなければなりません。

実際は、麻原が計画の実現を急いだったので、関係者は実験によってノウハウを蓄積するどころか、基本的な調査や設計に必要な実験さえも不十分でした。少なくともこのような環境が変わらない限り、計画は成功しなかったでしょう。

ボツリヌス菌に関する補足

村井によると、同菌は自身より微細なトキシンの粒子を体外に放出することでした。本計画の濃縮工程のフィルターの使用は、それに基づきました。